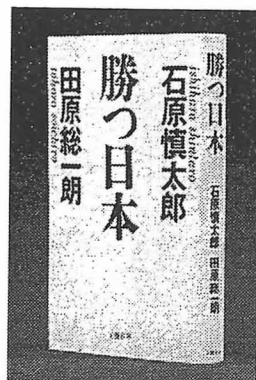


ベストセラー 快読

■橋爪大三郎■



『勝つ日本』とは威勢がいが、心配なく。中身はまことな対談だ。足るみするこの国をどう立て直せばよいか、論客の二人が、政治、経済、外交、憲法など、二十一世紀の課題を総ざらいする。作家・東京都知事・元代議士の石原慎太郎氏。ジャーナリスト・TVキャスターの田原総一朗氏。立場の違う二人

『勝つ日本』

石原慎太郎・田原総一朗著

だが、共通するのはこの数十年、自民党政治家をはじめ指導的な立場の人びとのふるまいを、間近に見続けてきたことだ。その上での診断は、ピシリ急所をついていく。

診断の第一は、自民党「経世会」政治の行き詰まり。利権や裏金で、派閥・野党・官僚・財界を意のままに操り、首相の首をすげかえる。竹下元首相が完成させた手法は、国内でしか通用せず、一九九〇年代の停滞をもたらした。策は、世界についての無知と誤解。冷戦のあとの国際

秩序を、日本も加わって、再構築しなければならなくなる。た。けれども、アメリカに對する甘えと反発、中国・アジアに對する後進めたと悔みに、目が曇ってしまう。自分勝手な希望の観測を織りませないで、他者を認識し、世界を考へるのが苦手である。

第三は、構想力の不足。日本が長所を評価し、欠点をみとめる自己認識が不徹底だ。二十一世紀の国家戦略を立て、国民の幸せと人類の発展をはかる政策論争はなお不徹底。このままだと日本は、じり貧になるしかない。

『勝つ日本』は

(文芸春秋・2463円・1,143円)

2000年12月18日発売。7刷18万部。近年最も「論争的」な2人。計6回対談し本にまとめた。タイトルは編集部案。「失われた10年をへて、このままではいけない、何とかしたいという気持ちがあった読まれているのでは」と担当者。

享月
業斤日
月

2001年(平成13年)2月11日(日曜日)

月

業斤

日

言

天皇の戦争責任

加藤典洋／橋爪大三郎／竹田青嗣

昭和天皇に戦争責任はあったか。あるとすれば、それは法的責任なのか政治的責任なのか道義的責任なのか。いやそもそも、天皇とは責任を問えるような存在なのか。本書は、このようなおそろしく厄介かつ微妙な問題に、いずれも終戦直後に生まれた同世代の三人の論者が正面から取り組んだ大膽な力作である。

加藤は天皇には戦争責任はあると主張し、橋爪はそんなものは問えないと論駁する。竹田は基本的に同僚だが、ときおり在日の立場から議論全体を相対化する。加藤と橋爪の対立は、左翼と右翼、革新と保守の対立ではなく、むしろ現実主義者と本質主義者の対立である。橋爪は断固として天皇の当時の法的地位にたどり、事実関係を明確にすればするほど天皇個人の責任は問えない、彼は彼なりに「ベストの選択」を行ったと言っほかない、と議論する。

対して加藤はその議論を一部認めつつも、しかしながら、多くの日本人がいまなお天皇の戦

時が可能にした語り方

争責任にたどるのには感情的な根拠があるはずで、そのしりは橋爪の理屈では解消されない、そのあたりで問題は残ると論じている。書評者としては加藤の現実感覚のほかに鋭くことが多かったが、むしろ判断は各人各様だろう。ぜひ自分の目で議論を追ってほしい。

昭和天皇の死から十年以上が経ち、太平洋戦争はすでに前世紀の話になった。時がすべてを風化させるのは許されないが、しかし時間的な距離が可能にする語り方もある。本書は何よりもそんな新しい語り方への意欲に満ちている。五百ページに迫る量の討議豊富な注と参考資料は、天皇の問題についていかに考えたものか、読者にも十分な手がかりを与えてくれる。あと八年も経てば昭和を知らない世代が成人になるが、そんな人々にこそ手に取ってもらいたい。(徑書房、2900円)

◇かとう・のりひろ＝一九四八年、山形県生まれ。明治学院大学教授。◇はしづめ・だいぞろ＝一九四八年、神奈川県生まれ。東京工業大学教授。◇ただけ・せいじ＝一九四七年、大阪府生まれ。明治学院大学教授。

●評者・東 浩紀(哲学研究者)

この思想家のどうを読むのか

西部邁 ほか著

洋泉社・七九〇円

福沢諭吉には、佐伯啓思。内村鑑三には、山折哲雄。以下、柳田国男、西田幾多郎、小林秀雄、三島由紀夫、吉田茂、丸山真男と、わが国を代表する八人の知性に対して、当代の学者・評論家八人が切り込んでいく。四十枚弱という限られた分量の原稿で、どこまでまっしぐらに相手の本質に迫れるかが勝負だ。批評の対象は本物で、相手に不足はない。評する八人の腕くらべとなつて、読みごたえのある競作となつた。こんな時代だからこそ、思想の古典を読み直すことの大事さがずしりと伝わってくる。

八篇に共通するテーマは第一に、「日本」である。柳田にせよ、小林にせよ三島にせよ、めいめいが自分なり

のやり方で、日本と日本人であることの意味と価値について、つき詰めている。近代という普遍的な出来事と、日本という特殊な伝統との交点に、わが国を代表する知性の誰もが思想的な命運を賭けざるをえなかったことに感銘を受ける。

テーマの第二は、脱神話化である。評者は一様に、戦後の通念を突き破つて、思想がうまれたその時代の必然をみつめようとする。その結果、福沢や柳田の場合は、教科書的なイメージの下からしなやかな思索の躍動がよみがえってくる。いっぽう、丸山の場合には、権威あるとされてきた議論の土台が、あやふやな漢文読解やヘーゲル哲学の焼き直しにすぎなかったと批判さ

「天皇制」という呼称を使うべきでない理由

谷沢永一著

PHP研究所・一六〇〇円

「天皇制」という呼称は新聞でも、テレビでも「普通」に使われている。それに違和感を抱く日本人はまずいない。しかし、天皇制という言い方は、「天皇制否定、天皇制廃止、天皇制打倒」という風に、皇室に敵対する表現である」と著者は断言する。

皇室は制度でもなく、機構でもない。わが国の歴史と一体不離の存在であり、ナショナル・アイデンティティーの根源と言える。

天皇制という敵対用語を初めてつくつたのはソ連共産党が指導するコミンテルンであり、それは大正十二年にわが国に持ち込まれた。敵意に満ちたこの造語の誕生の経緯を明らかにしつつ、著者は「日本語の使い方を正したい」との深い思いを本書に込めた。天皇制ではなく皇室という呼称こそが伝統にかなう。

れる。ひと昔前なら考えられない、思い切った指摘である。

印象的な章を、任意にあげてみる。

西田幾多郎に対する松本健一は、難解とされる西田の「絶対矛盾の自己同一」は決して難しくないと言う。白と黒は、正反対で相いれないが、それは色という共通の土台があればこそ。白と黒という矛盾が、色という同一性に支えられている。この世界の構造もそれと同じだ、とりわけ「日本」と日本

トロールの発想を育てなかったこと。西部による吉田の像は、三島由紀夫の仮面の意味するところを掘り下げた高澤秀次の論と対照させると、いっそう味深い。

本書は、企画の勝利である。あとがきで、仕掛け人の田中紘太郎がのべるように、《これまで：論じてこなかった、しかし：避けて通れない》執筆者と思想家の絶妙な《組み合わせから：生じる火花や論理の交差》こそが見ど

執筆者と思想家の絶妙の組み合わせ

的なエートスのあり方はそうであるという洞察を、哲学を「何となく」選んだという西田の歩みを追うなかで、松本はさぐりあてる。

吉田茂に対する西部邁は、戦後日本の出発点にまつわる矛盾に焦点をあてる。親英的なエリート主義の吉田が、アメリカ的な民主主義の戦後日本をたちあげる役回りを演じたこと。反軍意識が強烈なあまり、平和主義的な日本国憲法にこだわり、シビリアン・コン

ころである。もともと『正論』に連載されたというシリーズが、あらためて新書で通読できるようになったのは嬉しい。

本書の論じる思想家たちは、日本の近代を力強く引っ張った。繁栄のあとの混乱のただなかにある現在、これだけの本質的な仕事ができるのかという危機感を覚えるのは、私だけだろうか。

東京工業大学教授 橋爪大三郎

NIPPONの気概

上原 卓著

モラロジー研究所・一七〇〇円

「使命に生きた先人たち」と副題の付けられた本書は、幕末から昭和前期までのおよそ百年の間に、日本という国を背負って駆け抜けていった三十八人の足跡を、簡潔平易に綴ったものである。

登場するのは佐久間象山、吉田松陰、勝海舟、新渡戸稲造、岡倉天心、高橋是清、岸信介といった人物で、彼らがいかに「世界の中の日本」を考え、日本の独立と自由、経済の発展と道義の確立に尽くしたかを知ることができる。それは同時に、個としての命よりも高い価値が存在することを後世に訴えるものだ。

著者はあとがきで「歴史は繰り返す」という言葉の意味を考えているが、それは過去から教訓を導き出すことの困難さの指摘にもなっている。二十一世紀の日本人が危機感をもって受け止めねばならぬ課題であろう。

2001年(平成13年)6月24日(日曜日)

Sunday Nikkei

日本経済新聞



戦後日本の原点、詳細に追う

戦後は遠くなった。うちひしがれた屈辱も、飢えや貧しさも、生きのびた喜びも、もはやひとことではかない豊かな世代が大半になった。そんな戦後を、生身の人間が織りなした濃密な歴史のページとして、眼前に再現してみせてくれるのが本書である。アメリカを代表する日本研究者の一人ダワー氏が、占領期の資料の山と格闘した。多様で雑然とした敗戦直後の、なつかしくさえある実像がふんだんに盛り込まれている。

著者は、占領軍の建て前の裏側で何

が行われていたか、人びとの混乱した心理の奥底で何が芽生えていったかを、きっちりの検証していく。前半は、敗戦にとまどいながらも、したたかに生きる日本人の適応力。後半は、新憲法と東京裁判に焦点をあてる。近衛文相、東条英機、GHQの将校たち、有名な無名の人びとのあいだで、終始巨大な存在であり続けるのは、マッカーサーと昭和天皇の二人だ。

半世紀を経たいまだから、歴史として冷静に語りうることもある。GHQとアメリカ本国政府との確執。マッカーサーの指示であつたたく日本国憲法ができたあがるまで。ダワー氏は、日本の旧指導部に厳しい批判の目を向けるいっぽう、七年にわたるアメリカの軍政がむしろ戦前の体質を温存してしまつたとも指摘する。また、極東軍事裁判が「事後法」にもとづく強引なもので、裁判の体裁をなしていないとも断ずる。総じて、アメリカの占領政策と戦後日本の体制の「正しさ」を見直す議論となっている。

そのいっぽうダワー氏は、日本のふつうの人びとが、上からの改革をよこんで受け入れ、積極的に戦後日本を築いたと感動をこめて語り、高く評価する。誰もが「平和」と「民主主義」を熱心に議論した。日本人は、敗戦を「抱きしめた」のだ。

戦後日本の原点に、日本とアメリカが異文化として遭遇し、まじまじと見つめあつた真剣な一時期があつた。日米安保をはじめ両国関係の再構築が必要ないま、そうした原点を思い起こすのも有益だと言えよう。三浦陽 ほか訳。(岩波書店・上下各二二〇〇円)

東京工業大学教授 橋爪 大三郎

敗北を抱きしめて(上・下)

ジョン・ダワー著

John W. Dower 38
年生まれ。ハーバード大で博士号取得。マサチューセッツ工科大教授。著書に『吉田茂とその時代』など。本書でジュリアス・アー賞。

識者100人アンケート 近・現代史を知る500の良書

「階級闘争史観」や「自虐史観」はもはや過去の遺物。冷静な眼で「日本の近・現代史」を振り返るための良書一挙公開!



166

SHOKUN/ 2001. 7

- ① 徳富蘇峰『近世日本国民史(全十六冊)』(講談社学術文庫)
明治維新の大業を理解するには、明治以前の時代の激動と日本人の業績を明らかにせざるべからずと、織田信長から説き起こす著者渾身のライフワーク。
- ② 吉田松陰『講孟習記』(講談社学術文庫)
密航に失敗し獄につながれた松陰は、外圧に狼狽してなすところを知らない日本人に、忠孝一如を原則とするシヨナル・アイデンティティの根源をおもひ起こさせる。
- ③ 山本七平『現人神の創作たち』文藝春秋(山本七平ライブラリーとして再刊)
尊皇攘夷思想の起源を、山崎闇斎学派の朱子学解釈にさぐる好著。
- ④ 猪瀬直樹『昭和16年夏の敗戦』(世界文化社。後に文春文庫)
若手の官僚・知識人を集めた内閣直属の総力戦研究所は、日米戦争をシミュレーションし、日本必敗を結論づける。このシミュレーションを忠実になぞって、日本は敗戦を迎える。
- ⑤ 児島襄『天皇(全五冊)』(文春文庫)
さきごろ亡くなった著者の、同時代史をひとつの物語に昇華させる筆力は、あなどりがたい。ほかに、『日中戦争(全五冊)』ほか多数の著書がある。

橋爪大三郎
(東京工業大学教授)

「弱者」という呪縛



小浜逸郎、桜田淳著

＜PHP研究所・1400円＞

本書の焦点は何と言つても、障害者。人びとにかならずつきあうであろう。小浜氏と対談する桜田氏自身が、気鋭の政治学者、そして重度の身体障害者だからだ。

桜田氏は言う、障害者が「権利を行使し、義務を履行するための仕組み」をきちんと具体的に作るべきである。国が必要な助力を与えるとしても、働けるだけ働かせ、納税その他の義務も果たすべきである。体験を踏まえて、ずしりと重みのある発言だ。小浜氏も「障害者のやったことだから、価値のあるもの」に決まっている」という裏返しのタブー意識を「武現象」として批判する。

障害者のほかに女性、子ども、高齢者、外国人など「弱者」とされる人びとについて議論が進む。両氏に共通するのは、自らを弱者に重ね合わせ、人権をふり

裏返しのタブー意識を超える論理

かざして国家を批判しながら、その実は国家に依存する人びとを大量に生み出した。「戦後民主主義」へのいきなりだ。

「弱者」は、国家を対峙できる特権的な存在なのか。そのはずはない。「弱者」にかつては国家を批判するまでに、市民の権利と義務を明らかにし、国家と市民の関係を再構築しよう、両氏は提案する。

こうして、たとえば「人権」は、障害者の自立した職業である限り、認めるべきだ。「ゆとり教育」より、基礎をみっちり習得させるほうが先決だ。男女の違いを完全になくせばよいとする「男女共同参画法」は誤りだ、などの結論が導かれる。

対談は荒削りで、論点があちこち飛び、ときに危なっかしい論法が目につく。桜田氏によれば「自らの節制と自制とは無縁の」「放談」の書なのだそうである。でも、そんな自由なやりとりだから、行き詰まった偽善的な戦後民主主義をその先に乗り越えるヒントもみつかる。この次はぜひ、両氏がそれぞれこれらの問題とじっくり取り組む、卓著を競みたいと思わされた。

東工大教授 橋爪大三郎

本・BOOK

☆夏休みに読む！ 教師必読の「この3冊」☆

【第二特集】

夏休みに読む！ 教師必読の「この3冊」 教育リーダーのための読書案内

夏休み。必ずしも日々の仕事の忙しさから解放されるわけではありませんが、自らの実践を相対化してみる、よい機会でもあります。ほっと肩の力を抜いて、久しぶりに読書などをしてみませんか。

今回は、さまざまな領域の専門家、現場の先生方による「夏休みのための読書案内」です。手堅い本から、お手軽な本まで、多くの本をご紹介いただきました。ぜひ活用ください。

なお、掲載順は、編集部アンケートが届いた順番となっております。ご了承ください。
(編集部)

★橋爪大三郎 (東京工業大学教授)

①加藤典洋『「天皇崩御」の図像学』平凡社ライブラリー 二〇〇一年

②ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて(上・下)』岩波書店 二〇〇一年

③橋爪大三郎『世界がわかる宗教社会学入門』筑摩書房 二〇〇一年

加藤さんの本は『ホーロー質』を再刊したものだ、いまだからこそ十年前の分析的的確さが光る。MIT教授ダワー氏の本はアメリカでもベストセラー。最後の本は私の東工大での講義をまとめたもの。

二〇〇一年の収穫

印象に残った本《全120冊》

橋川 大三郎

朱建栄『毛沢東のベトナム戦争——中国外交の大転換と文化大革命の起源』(東京大学出版会)は、冷戦の転換点となったベトナム戦争の舞台裏を、最近公開の進んでいる各国の資料も踏まえて概観する。現代史の空白を埋めようとする大変な力作だ。

木佐芳男『八戦争責任』とは何か——清算されなかったドイツの過去』(中公新書)は、日本のお手本とされるドイツで意外にも、戦争そのものについての責任が直視されてこなかったという実態を明らかにする。読売新聞記者と

してドイツに滞在した当時の感触を、辛抱よく追い続けてきたに似ている。

中村好寿『軍事革命(RMA)——情報Vが戦争を変え』(中公新書)は、タイムリーな書。兵器や社会基盤をコンピュータ・ネットワークが支える現在、戦争はクラウゼヴィッツ以来の消耗戦から麻痺戦に移行する。軍事目標に限らず弱い「要」(WTCやペンタゴン)を同時攻撃するのが効果的だ。精密誘導弾の代わりに、乗っ取り旅客機が使われた。アメリカの同時多発テロは、まさにこの理論で計画・実行されたのではないか。(はしづめ・だいさつろう氏「東京工業大学教授・社会学専攻」)

【大/反/響/増/刷/出/来/】

ジンダラー 敗北を抱きしめて

第二次大戦後の日本人

三浦陽一
高杉忠明
田代泰子 訳

ピュリッツァー賞受賞作

●ともすれば情緒と憶断に傾斜しがちな風潮に反省を強いる意味でも、味読すべき価値ある一冊。
(匿名批評/時事通信配信)

●本書を読んだ人は、まるでバルザックの小説を読み終えた後のように、ここで登場する占領期のアメリカ人や日本人の素顔を、何度も思い出すことになるだろう。
(藤原一評/中央公論8月号)

●近年にない日本現代史の傑作である。(加藤一郎評/エッセイスト7・17)

●様ざまな可能性を含んだ、錯綜した占領期日本の現実を、ありありと読者の前に再現した。
(石田雄評/季刊文壇22号)

●これだけ生き生きと書かれた「日本占領史」は他にないと思えます。
(東京都国分寺市・牛山敦二)

●過ぎ去ったこの時代の動きが、実に丹精に描き出されている。感銘をあらたにした大作。
(新潟県新潟市・皆川英二)



岩波書店



四六判・平均476頁
本体各2200円